

葛飾北斎の富嶽三十六景の謎を解く



歌川**広重**:甲斐御坂越 富士三十六景(1858)

実際の旧御坂峠付近眺望



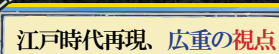
船津



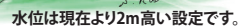
(現在)

甲斐御坂越の視点

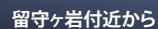
新御坂トンネル
この上が旧御坂峠

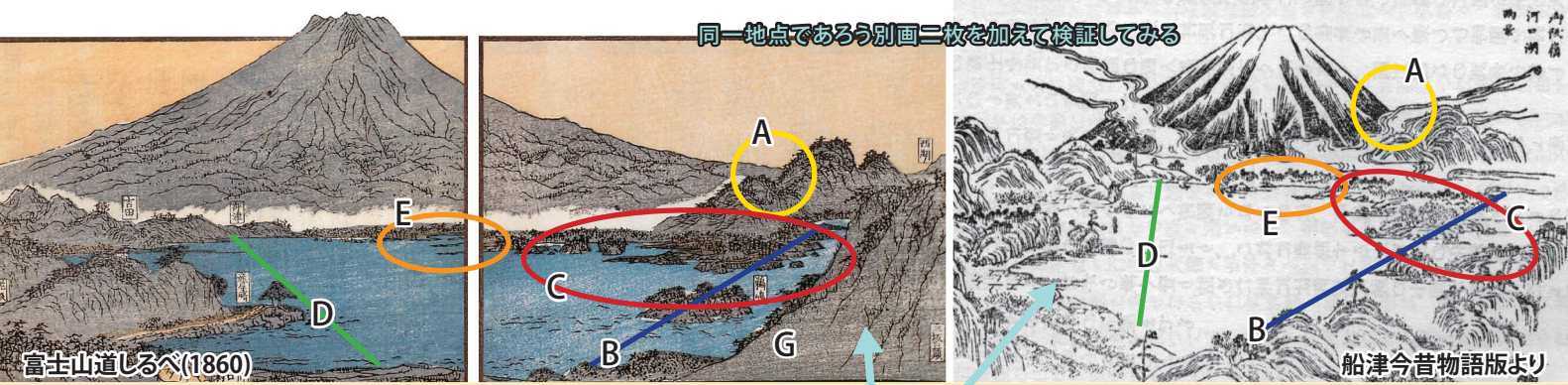


特定方法は裏面

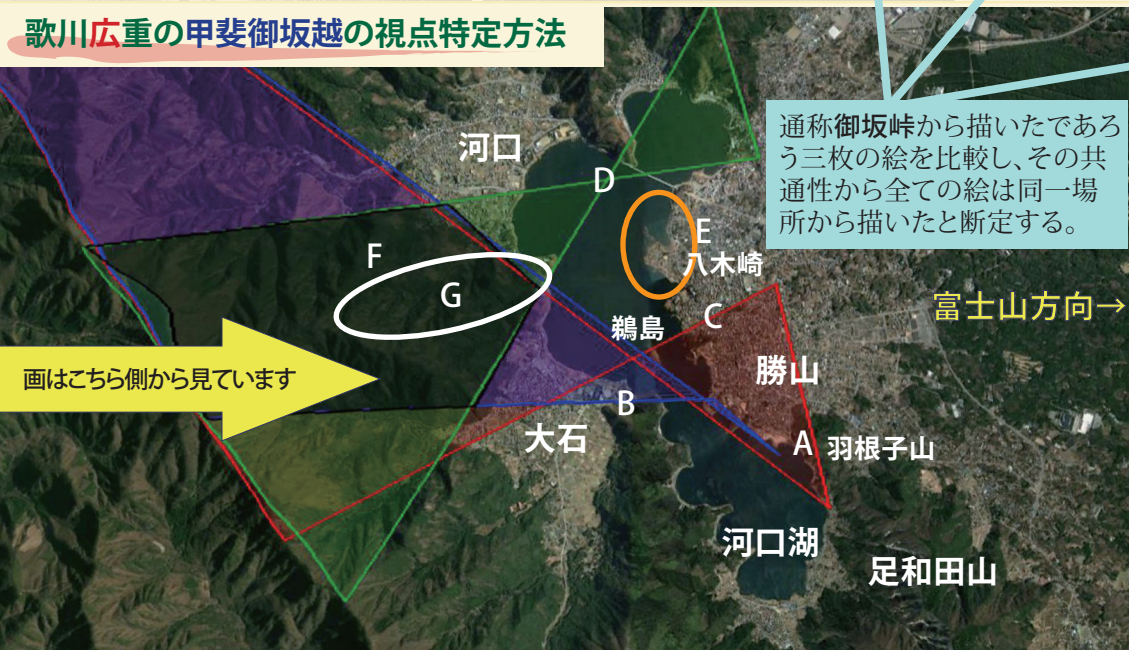


特定方法は裏面

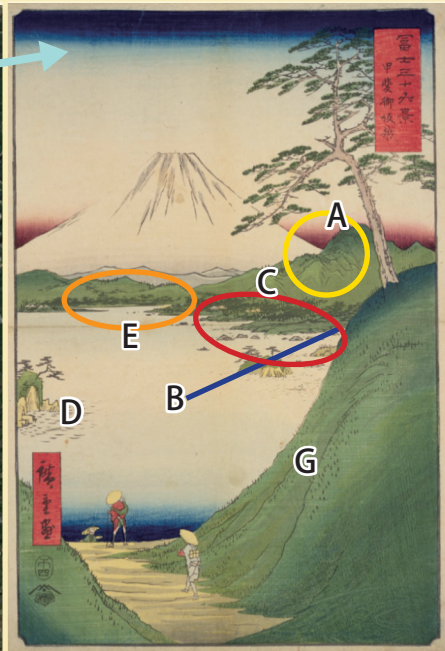




歌川広重の甲斐御坂越の視点特定方法



通称御坂峠から描いたであろう三枚の絵を比較し、その共通性から全ての絵は同一場所から描いたと断定する。



A: 富士山の稜線が足和田山に掛かっていることから、標高の高い場所から見ているのでは無いと分かります。例えば、1,500mを超える御坂尾根から富士山の稜線を見ると足和田山より高いところを富士山の稜線が横切ることになります。つまり、足和田山と富士山の稜線の重なりを観察すると、どの高さから見た景色か判明します。しかし、Aのコブの様なものは足和田山の山頂に見えますが、遠く富士山の太室山の重なりの可能性もあります。よって、視点の高さは二つの候補が付きまといます。

B: 青い線のように特徴が並んで見える視点位置のエリアを地図にプロットします。

C: 赤い領域のように見える視点位置のエリアを地図にプロットします。

D: 緑色の線のように特徴が並んで見える視点位置のエリアを地図にプロットします。

E: オレンジの領域は現在の八木崎だと推定し、エリアを地図にプロットします。

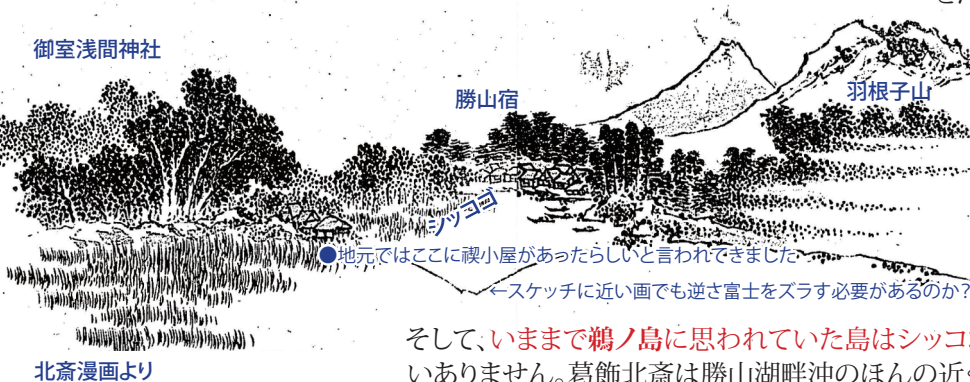
F: 白丸のエリアが上記A~Eの共通部分で、この範囲に甲斐御坂越の視点があると推定できます。

G: 絵にある丘か崖のような景色を意識して今回新発見の視点を現地で確認しました。



葛飾北斎の甲州三坂水面の視点特定方法

NHK番組にて発表した「凱風快晴」に続き新発見となります



北斎の三坂水面は上記の御坂峠の考察に当てはまりません。どうやら、もっと里に近い場所で描いているようです。そこで、同じ北斎の別絵から考察します。この画は「北斎漫画」に収められており、三坂水面の元画になったと言われている絵です(左絵)。いかがでしょうか?

地元なら勝山沖合から描いていると見えませんか? 実は船に乗りながら富士ビュー沖(留守ヶ岩)から御室神社に向かってスケッチをすると左絵のように描けます。逆さ富士は移動しながら描くとスケッチ場所の違いで北斎画のように上下でズレが生じます。

そして、いままで鶴ノ島に思われていた島はシッコゴ公園沖の溶岩の一部が湖から露出したものに間違いありません。葛飾北斎は勝山湖畔沖のほんの近くで甲州三坂水面を描いていたことになります。

二百年間、御坂峠だと思われてきた浮世絵はもっと、ずっと、里に近いところで描かれていた。



富士五湖ドットTV
fujigoko.TV
<https://www.fujigoko.tv/>
他の北斎視点詳細はこちらから。
記:久保寛



通説:妙法寺
新説:神社禊小屋

通説:鶴ノ島
新説:浮溶岩

